



Title	マーシャルの初期心理学研究と経済学における人間研究の意義
Author(s)	松山, 直樹
Citation	経済學研究, 59(4), 59-76
Issue Date	2010-03-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/42776
Type	bulletin (article)
File Information	ES59-4_005.pdf



[Instructions for use](#)

マーシャルの初期心理学研究と経済学における 人間研究の意義

松山直樹

はじめに

本稿の目的は、アルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) の研究遍歴を考察することを通じて、彼の人間研究の意義を評価することにある。この分析によって、マーシャルの主著『経済学原理』(以下、『原理』と略記) で述べられた「経済学が一面においては富の研究であると同時に、他面において、またより重要な側面として人間研究の一部である」(Marshall 1961, 1 / 訳[一] 2頁) という言葉の真意を、より明確に理解することができるであろう。

マーシャルは、ケンブリッジ大学の数学科をセカンド・ラングラーで卒業した後¹⁾、10ヶ月間、プリストル郊外のクリフトン・カレッジで数学の臨時講師を勤めた。そして、カレッジで同僚となったモズリーの紹介でシジウィックと相識の間柄になった²⁾。そのため、マーシャル

は、ケンブリッジに戻った後、シジウィックの紹介で他のカレッジの道徳科学を研究する人々と交流をもつことができた³⁾。彼は、1867年にグロート・クラブへの加入が認められると、本格的に心理学の研究を開始した。マーシャルにとって、心理学は、人間の能力が発達する可能性を探求する魅惑的な研究であった (Keynes [1933] 1972, p.171 / 訳 230頁)。

ところが、マーシャルの心理学研究はそれほど長く続けられたわけでない。マーシャルは、1867年に経済学の研究を開始しており (Pigou 1925, p.358)、1872年頃、経済学を生涯の学問にすることを決心した。マーシャルが経済学者となる道を選んだという事実は、心理学研究に

3) マーシャルはシジウィックが亡くなった後、「私は名義において彼 [シジウィック] の教え子ではなかったのだけれども、実質的に道徳科学において彼の生徒であった」(Keynes [1933] 1972, p.168 / 訳 225頁) と述べている。ところが、マーシャルとシジウィックは、経済学トライポスをめぐって対立した。マーシャルがケンブリッジ大学の教授就任演説のなかで経済学を道徳科学のトライポスから独立させる必要性を説いた一方で、シジウィックは経済学と道徳科学が不可分であると考えたからである。さらに、本稿で明らかにするように、マーシャルにとって心理学研究は、経済学理論を支えるものである。このようなことから、マーシャルのシジウィックへの私淑と経済学の専門化に対する態度の矛盾は、マーシャルの『原理』の性格——定式化された経済法則にもとづいて物質的福祉の向上について論じており、精神的福祉の向上のメカニズムや分析上の基礎となる柔軟な人間本性の考察を捨象している——と密接に関連していると思われる。

1) ケンブリッジ大学の学位認定試験はトライポス (tripos) と呼ばれている。四人の試験官が、一人あるいは二人一組で試験問題を出题する形式である。通常は筆記試験である。試験は二部構成になっており、パート に合格した者がパート の受験資格を得る。そして、パート の合格者にはラングラー (wrangler) の名称が与えられ、フェローシップが約束される。マーシャルは数学のトライポスを二位で合格した。詳しくは Groenewegen (1995) を参照されたい。

2) マーシャルは、同じ数学教師であったディキンズを通じてモズリーと知り合っている。当時、モズリーは、シジウィックらとともにグロート・クラブ——ケンブリッジの討論サークル——に参加していた。

対する関心を完全に放棄したことを意味するのであろうか。

旧来のマーシャル研究において、マーシャルの心理学研究は、彼の研究上の単なる出発点として位置づけられていたにすぎない。例えば、馬場(1961, 4-5頁)によれば、マーシャルの経済学研究の開始は、心理学の研究を通じて、彼が人間本性を向上させようとする経済的条件の重要性に気づいたことに起因しているという。また、マーシャルの心理学研究論文の存在を認識していた Whitaker(1975, vol. 1, pp.7-8)でさえ、心理学研究が彼の経済学と通底していることを論じていない。

このような解釈は、マーシャルの心理学研究論文の公刊によって大きく変容することになったといえる。例えば、マーシャルの第三心理学研究論文 'Ye Machine' の議論を参考にして⁴⁾、西岡(2003)は『原理』で展開されている分業構造に関する議論を多角的に進化する脳組織として捉えることから、そして、Raffaelli(2003)は『原理』第四編における人間の思考や運動に関する議論を神経生理学として捉えることから、心理学研究と経済学との関係性を示唆した。松山(2010)は、'Ye Machine' における性格(character)に関する分析が、マーシャル経済学で想定される人間本性(human nature)の概念に反映されていることを指摘した。また、松山(2009a)では、マーシャルの心理学研究で扱われる共感の概念を詳細に検討することから、彼の有機的な経済成長理論 人間と社会の相関的進歩 の根源的なメカニズムが心理学研究にもとづく共感の概念に拠っていることが明らかにされた。さらに、岩下(2008)は、マーシャルの心理学研究に取り組むことによって「彼

[マーシャル]の原初的思考様式や思想の視点を見定めていくことは、頑固な旧来のマーシャル像を大きく回転させていくうえで、大きな意義をもっているのは確かである(岩下 2008, v頁)と述べた。このように、近年の先行研究によれば、マーシャルの心理学研究は、「彼の経済学の出発点」という狭義の解釈から「マーシャル研究の新たな解釈を促進するもの」として広義に解釈される傾向にあるといえる。

また、ケインズの「マーシャル伝」⁵⁾には、晩年のマーシャルが自らの理想が経済学ではなく心理学にあったと述べたことが記されている(Keynes [1933] 1972, p.200 / 訳 266頁)。この記述は決して看過することのできないものである。だが、さらに重要な論点として、彼の理想とした心理学が具体的にどのような学問的性質であるのかという問題がある。なぜなら、マーシャルは、経済学には実験的な手法を用いる社会心理学が必要だと述べているからである。したがって、本研究は、マーシャルの理想が初期心理学研究にあることを明らかにし、それが彼の有機的な経済成長理論に不可欠な人間研究として評価できるという視点から議論を展開する。このようにして、先行研究から導かれた広義の

5) 本稿で Keynes(1933) 1972)と記されるものは、ケインズの『人物評伝』に収められた「マーシャル伝」である。尚、白井(1933)は、ケインズの「マーシャル伝」が経済学史研究における貴重な資料であるとともに、文学作品であることを忘れてはならないと指摘している。さらに、ケインズとともにブルームズベリー・グループ 秘密サークル に属していたリットン・ストレイチーは、人物評伝という文学の一ジャンルを形成しており、ケインズのそれもストレイチーの作品と比較に耐えうるものであるという(白井 1993, 153頁)。白井(1993)以外にも、マーシャルの出生に関する記述の修正が Coase(1984) 1996)や Groenewegen(1995)によってなされており、現状では、西岡(1997)がもっとも正確であるという評価がなされている。ところが、「マーシャル伝」に記されているマーシャルの言葉の信憑性を再調査する研究は、現在のところないように思われる。

4) 第三心理学研究論文 'Ye Machine' は 脳 - 身体モデル や 大脳 - 小脳 - 身体モデル というように、擬人化された機械を想定することによって、人間の精神現象を分析したものである。詳細は、西岡(1993; 1997), Raffaelli(1994; 2003), 松山(2009a; 2010)を参照されたい。

解釈をより明確なものにする。さらに、彼の初期心理学研究とマーシャル経済学で扱われる心理学が、どのような関係にあるのかということも明らかにすることもまた本稿の課題である。

以上のような問題意識のもと、本稿は次のように展開される。まず第 節において、マーシャルの初期心理学研究から経済学へ学問移行の原因について探求する。第 節では、マーシャルの考える経済学の方向性が有機的な経済成長理論にあることを指摘する。さらに、彼の有機的な経済成長理論が、1875 年のアメリカ研究旅行によって経験的事実を提供されていることを明らかにする。つづく第 節では、マーシャルの理想が経済学ではなく心理学にあることを明確にする。さらに、マーシャルのいう理想としての心理学が初期心理学研究と整合的であるかどうかについて論ずる。最後の第 節では、全体のまとめを行い、経済学の制度化に伴うマーシャル経済学の実践的な側面について若干の示唆を与える。

心理学研究から経済学へ

本節では、なぜマーシャルが心理学研究から経済学へ学問移動をする必要があったのかを明らかにすべく、彼の学問移動の原因を(1)実際の緊急性(2)経済学の数学的定式化、という二つの側面から各々探求する。

(1) 学問移動の原因 1 : 実際の緊急性

マーシャルは 1867 年から 1868 年にかけて心理学研究に取り組んでいた。そして、グロート・クラブにおいて四編の心理学研究論文を報告した⁶⁾。彼の心理学研究の目的は、人間の能力が発達する可能性を探求することであった(Keynes [1933] 1972, p.171 / 訳 230 頁)。特に、第二心理学研究論文 'Ferrier's Proposition One' のなかで指摘されているように、マーシャルは、スコットランド学派の試みることのなかった、自我を客観的に分析する必要性を強く感じていた(Marshall 1867b, pp.110-111)。それゆえ、第三心理学研究論文 'Ye Machine' では、連合主義心理学の分析手法にもとづいて人間の意識メカニズムの解明が試みられた。

ところが、マーシャルは、若い頃から労働と休息の関係について関心を抱いていたことに加えて⁷⁾、都市部における貧困問題が顕在化しつつあったことから、心理学が外的環境の変化そのものについて説明できないことを認識した。彼の心理学研究は、外的環境の変化による受動的な影響を考慮して、人間の肉体的・知的・道徳的な行為を実行させる意識メカニズムを検討するものであった。そのため、心理学研究では、外的環境の変化に内在する法則性やその作用因について分析することができなかった。結果と

6) マーシャルの心理学研究論文は、以下のとおり。第一論文 The Law of Parsimony (節約の原則)、第二論文 Ferrier's Proposition One (フェリエの第一命題)、第三論文 Ye Machine (機械論)、第四論文 'The Duty of Logician or the System-maker to the Metaphysician and to the Practical Man of Science (形而上学者や実践的学者に対する論理学者ないし学説の作り手の責務)。第一論文および第二論文は、Loasby (2006) や門脇 (2007) に詳しい。第四論文は Raffaeil (1994)、Groenewegen (1995) に詳しい。

7) 労働と休息について、マーシャルは次のように述べている。「17 歳頃に、生涯における一転機が生じた。私はリージェント・ストリートで、ひとりの職人がショーウィンドウの前でぼかんと立っているのを見た。彼は、商店の窓にその店の商売を簡単に記した案内の文句をスケッチする準備をしていたのである。それはガラスに白い文字で書き付けられるものであった。仕上げを立派にするためには、腕と手を用いるたびに [それらを] のびのびと一気に運ぶ必要があった。おそらく激しい緊張が占めていたであろう。彼は心臓の鼓動がおさまるように、一筆ごとに数分間そのままじっとしていた。もしも彼がこのように失われた十分間を節約したならば、彼の雇い主は、かえって一日分の賃金の価値以上の損害を被ったであろう (Keynes [1933] 1972, p. 165 / 訳 221-222 頁)。

して、マーシャルは、友人からミルの『経済学原理』を薦められたことも影響して、経済学に関心を寄せていくことになる(Keynes [1933] 1972, p.171 / 訳 229 頁)。マーシャルは学問移動時の心情の変化について、ジェームズ・ウォード宛の手紙(1900 年 11 月 23 日付け)のなかで次のように述べている。すなわち、

私は、1871 年頃まで自分の本拠地が精神科学(Mental Science)にあるといつも言っていました。しかしながら、徐々にではありますが、福祉(well-being)に対する手段として経済学研究のますますの緊急性が私のなかに次第に高じてきました。1871 年から 72 年頃に、私は心理学ないし経済学のどちらに生涯を捧げるのかということを決めなければならない時がやってきたのだと自分自身に言い聞かせました。私は一年間も迷っていました。なぜなら、探求の楽しみという点で心理学のほうを常に好んでいたのですが、経済学は、富の成長(the growth of wealth)に関してではなく、むしろ生活の質(the quality of life)に関して、実際の緊急性(practical urgency)をますます大きくしていました。そして、私はそこ [経済学] に落ち着きました…。

(Whitaker 1996, vol.2, p.285)

1860 年代のイギリスはヴィクトリア朝の繁栄期にあった。そのような中で、都市部における労働者階級の平均所得が上昇する傾向を示す一方で、実際には、貧富の差が拡大していた。そして、イギリスは、1870 年代から 1880 年代にかけて大不況期を経験することになる。このような事実をふまえて、マーシャルは「この [貧困に起因する] 弊害は累積的なものである」(Marshall 1961, p.562 / 訳 [四] 86 頁) と述べた。貧困問題は実際の緊急性を有するものであった。上記の手紙に明らかであるように、若きマーシャルは、人間の質に影響を及ぼす生活の質に関する問題が深刻になりつつあることを

十分に認識していた。

また、1859 年にダーウインの『種の起源』が出版されたことを契機にして、進化論が、1860 年代から 70 年代にかけてヨーロッパの社会思潮に対して大きな影響を及ぼした。そして、自然界における生物進化の法則が社会経済現象に適応しようと主張したのは、ハーバート・スペンサーであった(飯田 1996, 363-364 頁)。マーシャルの経済学が、スペンサーの影響を受けていたことはよく知られているが、実際には、経済学研究を開始する以前の心理学研究もまたスペンサーの影響を受けていた。

マーシャルは、第一心理学研究論文 ' The Law of Parsimony ' のなかで、スペンサーの共感の概念に対するアプローチが決定的に重要であると評価した(Marshall 1867a, p.99)。第三心理学研究論文 ' Ye Machine ' では、共感のメカニズムについて議論を行い、自然選択の力のなかで共感の原理がもっとも強い力をもつことを主張した(Marshall 1868a, p.130)。『原理』においても、スペンサーの社会有機体説を参考にして、共感の概念を中核とする経済社会における適者生存の法則について述べている(Marshall 1961, p.243 / 訳 [二] 161 頁)⁸⁾。このように、マーシャルが心理学研究以来、一貫してスペンサーの議論を考慮していたことは明らかであろう。

スペンサー自身はまた、マルサスや J.S.ミルの経済学からの影響を受けて適者生存の法則を展開した(飯田 1996, 364 頁)。前述したように、マーシャルも経済学を研究するにあたって、友人からミルの『経済学原理』を薦められていた。グローネヴェーゲンは、「[初期のマーシャルによる] ミル研究は、マーシャルの経済学的思考の発展にとって数十年も続く重要なものであり続けた」(Groenewegen 1995, p.149) と述べている。マーシャルは、スペンサーとミルの両者

8) マーシャルの共感の概念に関する議論は、松山 (2009a) に詳しい。

から影響を受けたことによって、人間を取り巻く社会的環境の変化を考慮する端緒を開くことができたと考えられる⁹⁾。

したがって、マーシャルの初期心理学研究は、人間の能力が発達する可能性を探求するものであったが、外的環境の変化を考慮することができないという点において、貧困問題を解決するための手段を持ち合わせていなかった。それゆえ、外的環境と人間の能力の相互規定的な関係を分析することができると思われた経済学を研究する必要があったのである。次に、マーシャルの学問移行の原因に関するもうひとつの動機を考察する。

(2) 学問移動の原因2：経済学の数学的定式化

マーシャルは1860年代後半に、J.S.ミルの『経済学原理』を数学に翻訳する作業に取り組んでいる¹⁰⁾。マーシャルは、経済学の研究を開始した頃のことについて、J.B.クラーク宛の手紙(1908年3月24日付け)のなかで次のように述べている。すなわち、

価値や分配の理論に関する私の主な立ち位置

- 9) さらに、マーシャルの宗教的な信条の側面を考慮する必要がある。マーシャルは、厳格な福音派の家庭のなかで育ったのであり、彼の父親はマーシャルを聖職者にすることを目的にパブリック・スクールへ通わせていた。
- 10) ケンブリッジ大学のマーシャル・ライブラリーのポイド・スブラッドブリー氏およびローランド・トーマス氏によれば、マーシャルが数学的定式化を試みる際に書き込みをおこなったミルの『経済学原理』は、ケンブリッジ大学中央図書館の貴重書コレクションに所蔵されているという。“this volume [Marshall's annotated copy of Mill's Principles of Political Economy] is actually held by the central University Library in their rare books collection.” (From Boyd Spradbury, 2009/02/26) 電子メールの一部を抜粋。また、グローネヴェーゲンは、ミルの『経済学原理』第四編第三章第四節におけるマーシャルの書き込みの一部を自著 *A Soaring Eagle* に掲載している (Groenewegen 1995, p.147)。

は、事実上、1867年から1870年の期間に完成されました。その期間に、私はリカードウやスミスの学説に関するミルの見解を数学に翻訳していました。そして、ジェヴォンズの本が現れた時、私は、ただちに、彼にどの程度同意し、あるいはどの程度同意できないのかを分かっていました。それからの四年間に、私は、数学的な独占理論やミルの国際価値に関する問題(この一部分は、平易な方法がパンタレオーニによる *Principii di Economia Pura* に印刷された)に関する図表的扱いについて相当に研究しました。...1870年から1874年の間に、私は、自らの理論的見解 (theoretical position) の内容を発展させたのです。

(Whitaker 1996, vol.3. p.183)

実際には、1869年に書かれた「リカードウの供給と需要について(On Ricardo on Supply and Demand)」というメモ書きが、マーシャルが初めて経済学について書いたものとして残されている¹¹⁾。そして、上記の手紙に示されているように、彼は、ジェヴォンズやミルの価値論に関する議論に注目していたのであり、1872年に「ジェヴォンズ氏の『経済学の理論』(Mr. Jevons' Theory of Political Economy)」¹²⁾を、1876年に「ミル氏の価値論(Mr. Mill's Theory of Value)」¹³⁾を発表した。さらに、1870年代の彼の経済学研究に関するマニユスクリプトには、クールノーやチューネン、チュルゴーらの経済理論について検討したものが¹⁴⁾。このように、マーシャルによる数学的な経済分析の

11) Whitaker(1972, vol.2, p.260)。現在のところ、筆者は、マーシャルが1868年以前に経済学について書いたものについて確認していない。

12) Pigou(1925, pp.93-100)。

13) Pigou(1925, pp.119-133)。

14) 例えば、'Annotations of Cournot (Whitaker 1972, vol.2, pp.242-243), On von Thunen (ibid., pp.250-252); On Turgot (ibid., pp.252-253) などがある。

研究は決して少なくない¹⁵⁾。概して、1867年から1874年にかけて、マーシャルは古典派経済学の数学的な理論を中心に研究していたといえる¹⁶⁾。1870年代前半のマーシャルは、古典派経済学の議論を数学的に解釈することに熱心であったのであり、それゆえ、経済学を数学的に定式化することに自らの活躍できる場があると認識していたと考えられる。

マーシャルがこのような数学的定式化をおこなった背景には、「経済学に対する数学のもっとも有用な適用は、少数の記号を短くシンプルに適用することであり、経済の無限の複雑さを表現することよりも、むしろいくつかの小さな部分に光を投ずることを目的としている」(Marshall 1898, p.39)という認識があった。マーシャルは、単純化された問題の解決を積み重ねていくことによって、現実の複雑な問題を解決することができると考えていた。

ところが、マーシャルの『原理』では、グラフや図式を用いて経済の分析がおこなわれており、数学的に定式化されたものは、そのほとんどが巻末の付録に収められた。積極的に数学的定式化を行っていたマーシャルが、経済現象を数学ではない言語で論証した背景には、どのような認識や意図があったのであろうか。ポレイ宛の手紙(1906年2月27日付け)のなかで、

15) 主要なマニュスクリプトは、ホイティカー氏によって編纂された *The Early Economic Writings of Alfred Marshall 1867-1890* に収録されている。

16) ケインズは、「マーシャルの真剣な経済理論研究は1867年に始まった。彼の独特な学説は1875年までにかなり発展していたのであり、1883年には、それらは最終的な形態をとりつつあった」(Keynes [1933] 1972, p.179 / 訳 240頁)と伝えている。さらに、馬場は、「1875年のアメリカ研究旅行に出発するまでは、なお既存の経済学説を吟味し、そのうちから経済の純粋理論をつかみだすことに主眼が置かれていた」(馬場 1961, 31頁)と述べている。このように、マーシャルが1874年以前に数学的な経済学に集中的に取り組んでいたことは、これらの先行研究が示すとおりである。

マーシャルは次のように述べている。

わたしは、その主題「数理経済学(Mathematico-economics)」に関する後年の研究において、経済仮説を扱っている価値のある数学の定理(good mathematical theorem)が優れた経済学(good economics)である可能性は極めて低いという考えが大きくなったことを認識しています。

(Whitaker 1996, vol.3, p.130)

さらに、ケンブリッジ大学の経済学教授職を退いた後のマーシャルは、「わたし[マーシャル]は、現在[1909年現在]、数学的な言語を安易に用いないようにしている」(Whitaker 1996, vol.3, p.228)と述べており、経済学への数学の直接的な適用を控えていた。このように、マーシャルは経済学研究を進めるにしたがって、数学的定式化に経済学としての説明力を見出さなくなると考えられる。図やグラフによって経済理論を論証するというマーシャルの研究姿勢は、1875年から1877年にかけてほぼ完成していた二編の草稿「外国貿易の純粋理論」と「国内価値の純粋理論」にも表れている¹⁷⁾。

以上より、マーシャルが心理学研究から経済学へ移った原因は(1)貧困問題などの実際の緊急性を心理学研究が扱えないこと(2)経済学の数学的定式化の可能性が残されていたこと、という二つがあると考えられる¹⁸⁾。次節では、後年のマーシャルが数学的な分析を展開しなかった根拠を明らかにすべく、彼の経済学の特徴につい

17) マーシャルは夫人との共著である『産業経済学』のために、これら二編の論文を発表しなかった。ところが、二編の論文で示されたアイデアの優先権を奪われることを危惧したシジウィックは、それらを非公式に印刷し、各国の経済学者に配布した(Keynes [1933] 1972, p.185 / 訳 248頁)。

18) マーシャルの学問移行の原因として、本論で検討した二つの原因のほかに、社会主義への情熱が考えられる。なぜなら、心理学研究に取り組んでいた1860年代後半に、マーシャルは、マルクスなどの議論に強い関心を寄せていたからで

て述べる。

マーシャル経済学と人間研究

本節では、マーシャル経済学の特徴を人間研究という観点から明らかにする。そのため、第一に、マーシャルの考える経済学の向かうべき方向性について考察する。第二に、マーシャルの目指した経済理論の基礎に人間研究が含まれていることを指摘する。

(1) 経済学者のメッカ

マーシャルは『産業経済学』を「労働者階級の読者のために、やむをえず簡単なものにした」(Keynes [1933] 1972, p.182 / 訳 243 頁)と述べており、こうして、『産業経済学』以後におけるマーシャル経済学の数学的定式化の位置づ

ある。例えば、マーシャルは、「この意味において、現代のすべての経済学者は社会主義者であります。私自身も経済学について何も知らない以前から、すでに社会主義者でした。私が 40 年前 [1867 年] に、A. スミスやミル、そしてマルクスとラッサールを読んだのは、社会改革において国家やそのほかの機関によって実現できるものは何かを知りたいと思う願望からでありました」(Marshall 1907, p.334 / 訳 143 頁)と述べている。さらに、八木によれば、「彼 [マーシャル] はドイツ語が読めたから、彼は 1867 年に刊行されたばかりの『資本論』第 1 巻をひもといた数少ないイギリス人の一人であったのかもしれない」(八木 1993, 141 頁)という。マーシャルは 1867 年に経済学研究を開始して以来、10 年間に社会主義の研究を熱心に行っていたことを告白している (Marshall 1923, p.vii / 訳 [一] 8 頁)。ところが、ツルベリーによれば、「彼 [マーシャル] は、その用語 [社会主義] のより特定された意義を、とりわけオーウェン、ラッサールおよびマルクスの著作と結び付けて理解していたのであり、彼は彼らの著作を読んで賞賛したのである。しかし、... 彼らの著作は、現実から離れていたため、彼を魅了するのとほとんど同じくらい彼に嫌悪感を抱かせた」(McWilliams-Tullberg 1975, p.76) と指摘している。1867 年がマーシャルの心理学研究が開始された年であることを考えれば、彼の心理学研究と社会主義の関係について独立した議論が必要であろう。

けが変化していく。『原理』第五編で展開された部分均衡理論——ひとつの市場において需要と供給が一致する点を部分均衡とする経済分析——は、いくつかの制限 (limitations) や条件 (conditions) を設けることによって、経済問題を図形的に説明可能にしたものである (ibid., p. 182 / 訳 243 頁)¹⁹⁾。マーシャルは、経済現象を難解な数学によって証明することに経済学の意義を求めていたのではない。彼は、経済学者などの専門家だけでなく、労働者階級やビジネスマン²⁰⁾ に対しても経済学の考え方を浸透させることを課題にしていた。

マーシャルはまた、数学的発想が単純な経済現象を分析する場合には有効ではあるが、複雑な経済現象の場合には別の論理が必要であると考えていた。なぜなら、「断片的な静態的仮説は、動態的な——あるいはむしろ生物学的な——概念に対する一時的な補助手段として利用されている」(Marshall 1961, p.xv / 訳 [一] 12 頁) にすぎないからである。このように、彼は、複雑な経済の動きを分析する場合に、数学的発想にもとづく静態的な分析が適切でないと考えていた。そうであるならば、経済学はどのような分析枠組みによって動態的な経済現象を扱うことができるのか。マーシャルは次のように述べる。

- 19) 「マーシャル伝」のこの部分は、「一流経済学者の横顔と略伝 (portraits and short lives of leading economists)」というドイツの編集物にマーシャルが寄稿したのから引用している。この寄稿文の全文は、ケンブリッジ大学のマーシャル・ライブラリーに所蔵されているという (Keynes [1933] 1972, p.181)。
- 20) マーシャルは、ビジネスマンを意識して自らの経済学を展開していたと回想している (Keynes [1933] 1972, p.200 / 訳 266 頁)。実際に、ブリストルのユニヴァーシティ・カレッジでの学長就任講演でも、「このような [政治経済学などの] 科学に関する研究がビジネスマンの教育の一部を形成しなければならない」(Marshall 1877, [36]) というように、ビジネスマンに対する教育の重要性を強調していた。

経済学者のメッカは、経済力学よりも、むしろ経済生物学にある。…そうであるから、われわれは、ある特定の財に関する供給、需要、価格の一次的関係を分離することから始める。われわれは、「他の事情が等しいならば (other things being equal)」というフレーズによって、すべての他の諸力を無活動まで減じるのである。…第二の段階では、…財のある特定の集団の需要と供給の状態において変化が作用し始め、それらの複雑な相互作用が観察され始める。…そして、最後には、膨大な数の異なる生産主体間の国民分配に関する分配 (the Distribution of the National Dividend) の重大な中心問題に到達するのである。…このようにして、経済学の主要な関心は、善きにせよ、悪しきにせよ、変化や進歩に駆り立てられる人間存在にある。断片的な静態的な諸仮説は、動態的なあるいは、むしろ生物学的な諸概念への一時的な補助装置として用いられるにすぎないのである。(Marshall 1961, pp.xiv-xv / 訳[一] 11-12 頁)

かくして、静態的な分析は、生物学の発想にもとづく動態的分析をおこなうための基礎として位置づけられたにすぎない。前節で指摘したように、マーシャルは、ミルの『経済学原理』を数学に翻訳することを通じて、経済学の研究を開始した。それにも関わらず、後の『産業経済学』や『原理』などの著作では、数学的表現を積極的に用いるのではなく、むしろ教育を起点とする倫理的な洞察が強く主張されている。このように、彼の研究上の関心は、経済の変化や進歩をもたらす人間行動だけでなく、人間本性にも向けられていたと考えられる。

マーシャルは経済理論を数学的に検討することによって経済学の研究を開始した。だが、経済学者のメッカとして経済生物学を提唱した。経済生物学は、後に詳細に検討するように、人間と社会の相関的な進歩を扱う理論であった。

その際、1870年代前半とそれ以後のマーシャルの経済学研究の相違への注目は、彼の経済学体系を理解するうえで非常に重要であると考えられる。それでは、マーシャルは、どのような経緯から数学的な経済理論から経済生物学へと分析の方向性を転換したのであろうか。

(2) マーシャルの経済成長理論とアメリカ研究旅行

マーシャルは、生物学的発想にもとづいて経済や社会の漸次的な進歩を説く経済学を、経済学者の向かうべき方向性として力説した。そして、そのような経済学は、教育による人間本性の陶冶と経済社会の物質的福祉の向上とが互いに影響を及ぼしあう現象を分析するというものであった。ところが、彼の1870年代前半の主な業績は数学的な経済理論が占めていた。この変化のひとつの契機として考えられるのが1875年に行ったアメリカ研究旅行である。マーシャルは新興国における保護貿易の現状を観察するため、アメリカに四ヶ月間滞在した。マーシャルは、このアメリカ研究旅行を経て、有機的な経済成長理論に関する経験的事実を獲得したと考えられる。そうであるならば、アメリカ研究旅行は、彼の経済学形成の過程に対して決定的な影響を及ぼしていたといえよう。

第一に、マーシャルは、アメリカ研究旅行後に報告した「アメリカの産業に関する諸特徴 (Some Features of American Industry)」(1875年)のなかで、アメリカとイギリスの産業構造の相違に注目した。そして、アメリカの経済発展が人々の「移動性 (mobility)」に起因していると考えた (Marshall 1875, p.357)。アメリカでは、ひとつの職業から他の職業への移動がイギリスに比べて容易に行われており、人々がある地域から他の地域へ頻繁に移動することによって、各地に共同体が形成され、産業や社会の発展が生み出されていた。

アメリカに限らず、経済に活力があり、発展している場合、当該国の産業状態は常に変動し

ている。ところが、そのような産業の変動状態こそが、人々の道徳的資質や知識の発展に直接的な影響を及ぼしているのである(ibid., p. 364)。マーシャルは「倫理的進歩が、...あらゆる時代や国において...産業状態と密接に関係していることは普遍的に認められている(ibid., p.374)という。倫理的な進歩は、最貧階級の人々の平均的な理解力に制限されているため、国を構成する最小単位の各共同体(コミュニティ)²¹⁾における教育が重要な役割を果たすのである²²⁾。

第二に、「アメリカの経済状態(The Economic Condition of America)(1878年)²³⁾では、主としてアメリカ人の気質を形成する要因が分析された。マーシャルは、アメリカ人の性格を性急であるであると指摘しながらも、「活力(energy)や活気(activity)で満たされている」(Marshall 1878, p.64)と述べた。アメリカ人は「キャリアの各段階で、イギリス人に比べて、自分自身の個人的な判断を、意識的かつ慎重に、自由かつ大胆に用いている(ibid., p.64)のである。マーシャルは、このようなアメリカ人の気質が「自分の人生のすべてを一つの仕事に費やすことは、アメリカの一般的ルールではない」(ibid., p.63)というように、職業環境にもとづいていると考えた。さらにマーシャルは、職業の訓練期間を通じて、「若いアメリカ人たちは、貿易や産業が絶え間なく変化するアメリカの様相のなかに、自分が公平な出発点に立つことのできる分野 その分野では、一人の人間が既

存の取引関係でもって成功の独占を手に入れることはできない を容易に見出すであろう、ということを理解している(ibid., p.63)と指摘した。したがって、アメリカ人は、成人するまでの間に、常に変化する経済状態のなかで生き残るために必要な能力を獲得するのである。そこでマーシャルは、自らの頭で考えることの重要性を以下のように指摘した。

若者は、学校や大学において知識を獲得するだけでなく、自分の頭(mind)を使うことを学ばなくてはならない。そして、彼の精神的活力が刺激されて、彼が職につく場合には、抑制されないようなやり方で自らの頭を使うことを学ばなければならない。

(Marshall 1878, p.67)

このようにして、マーシャルの有機的な経済成長理論 人間と経済・社会の相関的な進歩は、アメリカ研究旅行によって根拠づけられていると考えられる。それゆえ、経済・社会の進歩を研究するためには、人間研究が不可欠なのである。

さらに、『原理』を検討することから、マーシャルの描く経済進歩の過程を明確に説明することができる。すなわち、第一に、人々は家庭内教育と学校教育を通じて人間本性を向上させる。第二に、これらの教育を通じて、人々の経済活動が活発になり、経済的進歩が生み出される。第三に、経済的進歩がもたらす国民分配分の増加は、物質的な福祉を向上させ、貧困を緩和させるのである。このように、マーシャルの経済進歩は人間本性の向上と密接に関係している。マーシャルは『産業経済学』において、次のように述べている。

人口成長が、生まれてきた人々の数ではなく、成人に達する人々の数に依存することを、覚えておかねばならない。...そして、ぎりぎり養っていくことができるけれども、人々が肉

21) トクヴィルは、「アメリカでは、共同体は郡よりも前に、郡は州よりも前に、州は連邦よりも前に組織されたものであるということが出来る」(Tocqueville [1835] 1951, p.39 / 訳[上] 82頁)と述べている。

22) トクヴィルは、各コミュニティに学校を設立すること、親が子供を学校に通わせることが法によって定められていることを指摘した(Tocqueville [1835] 1951, p.40 / 訳[上]84頁)。

23) Marshall(1878)は、1878年1月15日付けのプリストル・マーキュリー・アンド・デイリー・ポストに掲載されたマーシャルの講義に関する要約記事である。

体的、道徳的、知的な教育を受けることができないほど、十分な備えもなく、若くして結婚し、そして大所帯を持つ場合には、一国の国民の気質(character)が下がるだろうということを忘れてはならない。

(Marshall and Marshall 1881, pp.31-32 / 訳 39 頁)

マーシャルは、家族愛が貯蓄として現れると考えており、教育によって人々が先を見通す能力を獲得することの重要性を指摘している²⁴⁾。知的な教育は将来を実感する能力を養い、道徳的な教育は家族愛を身に付けさせる。それと同時に、人々は、肉体面における教育によって作業効率を高めるための技術を獲得しなければならない。この三つの教育²⁵⁾によって、人々は、家族愛にもとづいて、遠い将来の利益を考慮して貯蓄を行うようになり、結果として、より高い賃金を獲得することができるようになる。したがって、「すぐれた教育は、普通の労働者にも重大な間接的利益をもたらす。そのような教育は彼らの知的活動を刺激する。彼らの内部に賢明な探究心を持ち続ける習慣を育てる」(Marshall 1961, p.211 / 訳 [二] 114 頁)のである²⁶⁾。

「アメリカ産業の諸特徴(1875年)では、人間本性と産業状態が互いに影響を与えているこ

とが示された²⁷⁾。『産業経済学(1881年)では、人間と経済・社会の相関的な進歩に注意が払われており、「経済進歩は家族愛に依存している」(Marshall and Marshall 1881, p.38 / 訳 47 頁)ことが指摘された。このようにして、マーシャルの有機的な経済成長理論が人間本性の研究と密接な関係を持っていたことを示すことができる。

しかしながら、マーシャルは経済進歩に関する文脈において、人間本性に関する具体的な考察を行っていない。ゆえに、彼は、経済進歩を生み出している人間の能力に関する研究を初期の心理学研究に期待していたのではないだろうか。そこで次節では、マーシャル経済学における心理学の扱いについて考察する。

マーシャルの学問的理想と心理学

本節では、経済学研究者となったマーシャルの理想について考察し、マーシャルにとって心

練を受けた人々は、一般的には、それらの欠如した人々よりも多くの稼得を得るのである(*ibid.*, p.46)という。つまり、スミスは人的資本に対する投資を期待収益の関数として捉えたのである。マーシャルもまた、「あらゆる資本のうちでもっとも価値の高い資本は、人間に投下された資本である」(Marshall 1961, p.564 / 訳 [四] 37 頁)というように、人的資本の価値を認めている。だが、「生産の人的要因は、機械や他の物的要因と同じように買われたり売られたりするものではない...。労働者はその労働を売るのであるが、彼自身はみずからの資産であり続ける。彼を養育し、教育する費用を負担する人々は、後年の彼の仕事に対して支払われる価格のうち、きわめてわずかな部分を受け取るにすぎない」(*ibid.*, pp.560-561 / 訳 [四] 33 頁)と考えていた。すなわち、マーシャルは、将来の収益を十分に見込んだ投資として人的資本を捉えていない。さらに、マーシャルは学校教育など以上に、「人間に投下された資本のうちでもっとも貴重な部分は、母親の配慮を影響の結果である」(*ibid.*, p.564 / 訳 [四] 37 頁)と述べている。

27) マーシャルのアメリカ研究旅行に関する詳細な検討は、松山(2009b)を参照されたい。

24) 『原理』では、「将来を実感する能力」や「人間の先見性」によって人々が貯蓄に動機付けられていることが指摘されている(Marshall 1961, p.233 / 訳[二] 143 頁)。

25) マーシャルの教育論の原型は、彼の第三心理学研究論文「Ye Machine」(1868)のなかに見出すことができる。

26) ブラウグは、マーシャルが教育や訓練を「人的資本(human capital)への投資の一形態として考慮するスミスの学説を全面的に賛成していないことを指摘した(Blaug 1996, p.401)。スミスの議論では、「人々の教育や訓練は、物的資本に対する投資と類似性を有する将来の稼得範囲への投資としてみなされうるのである。つまり、この投資は、仮に経済的に正当化されるならば、学生や訓練生の生涯時間を通して償われねばならない。このように、より良い教育や訓

理学研究がいかに重要であったのかを指摘する。さらに、マーシャル経済学で扱われる心理学と彼の初期心理学研究との一貫性の有無についても明らかにする。

(1) 「マーシャル伝」におけるマーシャルの学問的理想

マーシャルは、経済学者の進むべき方向性を経済生物学に求めていた。『原理』では、経済生物学は、人間と経済・社会の相関的な進歩を扱う有機的な経済成長理論として扱われており、その基本的な枠組みが第六編において示されている。マーシャルの経済成長理論は、人間研究にもとづくものであった。彼の経済学は、「国民のもつ肉体的、知的ならびに道徳的な健康と強さを左右する条件を考察しなければならない」(Marshall 1961, p.193 / 訳[二] 85頁)ものであった。言い換えれば、マーシャルは、経済進歩の原動力を、肉体的な教育、知的な教育、そして道徳的な教育を受けた個々の経済主体に求めたのである。その実際的な根拠は、「アメリカ産業の諸特徴(1875年)に見出すことができた。それゆえ、マーシャル経済学において、経済主体の人間本性は、固定的なものではなく、柔軟なものとして仮定されねばならない。人々は、教育を通じて自らの潜在的な能力を発達させるからである」²⁸⁾。

ところが、マーシャルは、経済主体の性質そのものがどのような原理で変化するのかという点について経済学で検討していない。このこと理由は、当時の科学的水準では、経済学が人間本性の変化を扱うことができない、というマーシャルの認識に求めることができるのかもしれない(Marshall 1923, p.676 / 訳一] 235頁)。

28) マーシャルは、人間と経済・社会の相関的な進歩を経済学において考察する必要があると考えていたため、リカードウや彼の追随者たちのように、固定的な人間本性を想定することに対して否定的な見解を示している(Marshall 1961, p.762 / 訳[一]278頁)。

このような彼の認識は、二つの論点を導き出すであろう。ひとつは、マーシャルが経済学研究を進めていくにしたがって、生物学的な発想にもとづいて展開される経済学においても、その理論的な限界に直面したという論点である。もうひとつは、マーシャルが晩年に至るまで経済学における人間本性研究に注意を向けていたという論点である。どちらの論点も、マーシャルの経済成長理論について考察する場合には、不可避免地に重要なものであるのだが、ここでは特に二つ目の論点に注目して考察を進めていきたい²⁹⁾。

二つ目の論点に関する直接的な根拠は、以下に示すマーシャルの回想の言葉から導出される。すなわち、

再び生涯を送らなければならないのなら、私は生涯を心理学に捧げるだろう。経済学は理想とのかかわりがあまりにも乏しい。もし理想について多くを語れば、ビジネスマンたちはわたしのものを読んでくれないだろう。

(Keynes [1933] 1972, p.200 / 訳 266頁)

第節で考察したように、貧困問題を含む実際的な緊急性は、マーシャルが心理学から経済学に移った原因のうちのひとつであった。貧困問題は、人間の精神的福祉の問題だけでなく、経済の物質的福祉という経済的条件の問題とも密接に関係していた。ゆえに、人間を取り巻く経済的条件ないし外的環境の変化を分析する必要があった。

経済学研究を開始した当初、マーシャルは数学的な経済理論を探求していた。だが、アメリカ研究旅行を境にして、人間研究を経済分析の基礎に位置づけるようになり、そして、『原理』では、物質的福祉と精神的福祉が相互に作用する累積的な発展過程を描く経済成長理論を展開

29) 一つ目の論点は、本稿の目的に対して本質的なものではない。それゆえ、この点に関する詳述は別稿に譲る。

したのである。その分析の基礎は、教育が人間本性を向上させるということにあった。マーシャル経済学における経済主体は、教育によって「将来を実感する能力」を獲得するものとして考えられていた。さらに、『原理』第五版(1907年)には、有機的な経済成長理論について議論した「第六篇 生活基準に関する進歩」が追加された。

このように、マーシャルは経済学の研究を進めるにしたがい、人間研究の重要性を再び強く認識するようになったと考えられる。したがって、マーシャルの初期心理学研究と経済学は断絶していたわけではない。マーシャルは、心理学研究にもとづく人間本性の検討を前提にして、有機的な経済成長理論の展開を試みた。ところが、結果として、当時の経済学の水準では、人間本性の研究を考慮することができなかった。それゆえ、晩年のマーシャルは、学問的理想として、人間本性に関する研究に取り組むことの重要性を強調したのである。

一方で、マーシャルの回想の言葉における「心理学」は彼の初期心理学研究と同一のものと推測されるわけであるが、実際に、マーシャル経済学で扱われる心理学が、初期心理学研究と同一のものであると断定できるのだろうか。そこで次に、マーシャルの回想における「心理学」が、人間の能力が発達する可能性を探求した初期心理学研究と一貫性を有しており、彼の経済学で扱われる心理学と異なることを明らかにする。

(2) マーシャル経済学で扱われる心理学

マーシャルの初期心理学研究は、人間の能力や精神現象を分析対象にしたものであった。彼の心理学研究は、なるほどビジネスマンたちの関心を惹きつける研究ではなく、実際の経済活動に対して直接的に貢献するものでもない。しかしながら、マーシャルは、自らの経済学的な著作のなかでも心理学に言及しているのである。このことから、マーシャルが自らの学問的な理

想と回想した心理学は、初期心理学研究と同じ性質の学問として一貫性を有していたのかという疑問がおのずと生じてくる。というのも、マーシャルの経済学がビジネスマン向けの学問として展開されていたことを考えるならば、彼の経済学のなかで扱われる心理学もまた実際の経済活動に対して有用なものとして展開されているはずだからである。したがって、この論点を考察することによって、マーシャルの初期心理学研究にもとづく人間研究の意義をより明確にすることができるであろう。

そこで第一に、マーシャルのフォックスウェル宛の手紙(1902年1月29日付け)に注目したい。マーシャルはその手紙のなかで、次のように述べている。

心理学はそれ自体が重要な研究であるのだが、経済学者にとって心理学は著しく有用性を欠いているとわたしには思われる。…経済学は社会心理学(social psychology)を必要としているのである。例。大衆の動機や区分に関する帰納的観察。

(Whitaker 1996, vol.2, p.348, 強調は引用者による)

マーシャルの初期心理学研究は、人間の意識メカニズムの解明に焦点があてられており、その分析手法はヒューム以来の連合主義心理学の系譜に沿ったものである。ところが、手紙に記されている例から明白であるように、経済学者になる道を選んだマーシャルが必要とした心理学は、彼の初期心理学研究と異なる学問的性質を有するものであった。

マーシャルの二大著作である『原理』と『産業と商業』の両者において、「社会心理学」という用語は一度も用いられていない。ただし、フォックスウェル宛の手紙に記された「大衆の動機や区分に関する帰納的研究」という学問的特徴を示す言葉に注目するならば、その事例が意味するものと類似した表現を『産業と商業』のなかに見出すことができる。すなわち、

アメリカでは、大学の研究者と専門的な広告機関が一体となって、現代の組織的で進歩的な分析と観察、実験と記録、および暫定的な結論を連続的に循環させるやり方を、商品のもっとも有効な訴え方の確定に応用していることは注目すべきことである。そのためのサーブिसに心理学が取り込まれている。

(Marshall 1923, p.307 / 訳二] 164頁)

くわえて、マーシャルは「例えば、広告のあるものは一ページ大に、あるものは半ページ大に、あるものは四半ページ大にして、それぞれ一団の観察者に示した結果、より大きな広告の方が大きさの割合以上に強く目を惹くことが判明した〔*ibid.*, p.307n / 訳二] 165頁)と述べている³⁰⁾。このように、マーシャルは、消費者心理への広告の影響を実験や観察によって分析することの重要性を指摘した。彼は、広告の影響に関する経済分析を展開するために心理学的考察が必要であると考えたのであろう。さらに、そのような分析が専門の研究機関との共同作業によって有効な結論を得ることができると主張した³¹⁾。このようなマーシャルの考え方は、経済学が社会心理学を必要とするフォックスウェル宛の手紙に記されていることと同様のものであると思われる。

ただし、マーシャルの考える社会心理学と、現代の社会心理学とは異なるものである。上記

の引用文を展開するにあたって、マーシャルは、『*ミュンスターバーグの『心理学と産業能力(Psychology and Industrial Efficiency)』の第20章 広告の効果に関する実験(Experiments on the Effect of Advertisement)*』を参照している(*ibid.*, p.307n / 訳二] 165頁)。ミュンスターバーグは、そのなかで経済生活における欲望と広告の効果を実験心理学にもとづいて分析した(Münsterberg 1913, p.256)。それゆえ、ミュンスターバーグの心理学は、心理学史において産業心理学に分類される(今田 1962, 249頁)。さらに、社会心理学という名称の心理学は、1908年に出版されたマクドゥガルの『*社会心理学(An Introduction to Social Psychology)*』に始まるものである(*ibid.*, 392頁)。マクドゥガルは、人間の意識について考慮しない行動主義を否定し、人間の行動が本能にもとづく感情(情熱や愛情など)によって動かされていると主張した(*ibid.*, 397頁)³²⁾。したがって、フォックスウェル宛の手紙が1902年に出版されていることを含めて考えれば、マーシャルの指摘する

上の論議が大部分を占めているものは、一般に簡潔であって、説明的で建設的である」(Marshall 1923, p.305 / 訳[二] 161-162頁)と述べる。後者について、マーシャルは「そのような[闘争的]広告の主要な影響は、理性(reason)を通してではなく、習慣の隠された作用を通じて用いられる。つまり、一般に人々は、善悪に関わらず、慣れ親しんでいないものよりも、慣れ親しんでいるものを選好する傾向がある〔*ibid.*, p.306 / 訳[二] 163頁)と説明する。さらに、闘争的広告は、二つの社会的浪費を伴っているという。第一の社会的浪費は、市場から淘汰された競争者が総利潤を失うということである。第二の社会的浪費は、大きな広告を提示することのできる大企業の影に小企業の存在が忘れ去られるというものである〔*ibid.*, p.307 / 訳[二] 164頁)。このように、マーシャルは、実際の企業の経済活動において広告が大きな影響力を持つことを指摘している。

32) シュンペーターによれば、マクドゥガルは、個人や集団の特性を分析するにあたって、本能や情緒といった概念を用いたことから、当時、『*社会心理学*』は強い人気を博していたという(Competer 1954, p.799 / 訳五] 1676-1677頁)。

30) これに対するマーシャル自身の意見は、次のようなものであった。「多数の定期刊行物に小さく広告するほうが、上述の試験の示唆する少数の誇張した広告に比べて、よりよい結果を与えるように思われる」(Marshall 1923, p.307n / 訳[二] 165頁)。

31) マーシャルはまた、広告の二つの形態について議論している。ひとつは、建設的広告(Constructive advertisement)であり、もうひとつは、闘争的広告(Combative advertisement)である。前者は、人々が購買または販売をおこなう際に、人々の注意を惹きつけるあらゆる方法のことを指している。その端的な事例として、マーシャルは「業界新聞の広告、とくに技術および科学

社会心理学は、現在でいうところの社会心理学ではなく、実験的手法を用いる産業心理学に近いものであったと考えられる。

このように、マーシャルが自らの経済学を展開するにあたって必要としたのは、人間の精神現象を分析対象とする心理学研究ではなく、実験や観察を分析手法とする心理学であった。これは、彼の主要な著作が労働者階級やビジネスマンを読者の対象として書かれたためであり、そのなかで扱われる心理学もまた、彼らの理解を促進するような性格のものであったからであると考えられる。さらに、貧困を解決させるために経済学に学問移動したことを踏まえれば、人間の能力が発達する可能性を探求する初期心理学研究こそ、マーシャルの晩年の回想に示された心理学と一貫性を有しているといえよう。このようにして、マーシャルのいう社会心理学は、彼の理想とする心理学とは異なるものであったと結論することができ、さらに、「晩年までマーシャルが経済学における人間本性研究の扱いに注意を向けていた」という第二の論点に関する間接的な論拠を示すことができるのである。

むすび

本稿は、マーシャルの研究遍歴を俯瞰することから、マーシャルが研究に取り組むにあたって、人間研究をいかに重要なものとして考えていたのかを明確にすることにあつた。それゆえ、マーシャル経済学における人間研究の意義をより正確に理解するために、マーシャルの思想・心情を探求した。本稿の議論は、以下のようにまとめることができる。

第一に、マーシャルの心理学研究から経済学への学問移動の原因を、実際の緊急性、経済学の数学的定式化、という二つに求めた。は、当時、顕在化しつつあった都市部における貧困問題に起因していた。心理学研究は、人間の能力が発達する可能性を探求するという点で、若きマーシャルにとって魅力であった。しかし

ながら、貧困問題は人間の質に影響を及ぼす生活の質に関わる問題である。したがって、マーシャルは、人間の意識メカニズムを探求することだけでなく、常に変化している外的環境との相互的影響のもとで人間を捉える必要があると考えた。は、1870年代のマーシャルの経済学に関するマニユスクリプトに注目することから導かれる論点であった。1875年以降のマーシャルは経済現象を数学的に定式化して考えることに重要性を見出さなくなっていくのであるが、1870年代前半の彼は、古典派経済学を数学的定式化することによる新たな説明原理に自らの活路を見出していた。

第二に、経済学の道を進むことになったマーシャルにとって、経済学の進むべき方向性は、静態の分析では捉えることのできない動きをみる、生物学の発想に基礎づけられた経済生物学にあつた。マーシャルはこれを「経済学者のメッカ」と呼んだ。1870年代前半において、彼は数学の経済学への適用可能性を探求していた。ところが、『産業経済学』以降、マーシャル経済学における数学的表現の重要性は、他のものに取り替わられた。このことは、『原理』における経済学の数学的定式化が、巻末の付録で述べられているにすぎないことによっても明らかであった。このような彼の研究姿勢の変更に関する原因を、本稿はアメリカ研究旅行に求めた。アメリカ研究旅行を経たことにより、マーシャルはアメリカとイギリスの産業発展の比較分析を行うことができた。そして彼は、アメリカの経済発展がアメリカ人の「移動性」という特質によって引き起こされていると考えた。マーシャルは、アメリカ人の移動性を形成している要因を探求することを通じて、経済発展に人間の道徳的な資質が大きく影響していることを見出した。このような人間と経済・社会の相関的進歩に注目する研究姿勢こそが、後のマーシャル経済学に大きな影響を及ぼすことになったのである。

『原理』において経済生物学は、人間と経済・

社会の相関的進歩を扱う有機的な経済成長理論として描写されていた。その理論は、人々が教育を受けることによって、肉体的・知的・道徳的に向上するというメカニズムにもとづいていた。このようにして、活動が欲望を抑制する生活基準の上昇が経済社会の累積的な発展を導く枠組みが展開される。したがって、マーシャルの経済成長理論の出発点には、経済主体の人間本性の向上を考慮した人間研究が位置づけられていた。

第三に、マーシャル経済学における人間研究の重要性は、彼の晩年の回想を考察することを通じて確認することができた。彼はビジネスマンを常に意識していたために、彼自身の理想に近いかたちで経済学を展開することができなかった。それゆえ、自分の理想を実現するためには、初期の心理学研究に取り組む必要があったのである。このようにして、マーシャルの理想が心理学にあることを示した。そこで次に、本稿は、回想におけるマーシャルのいう心理学がどのような学問的性質であるのかを明らかにした。

マーシャルは、生涯において二つの心理学を展開していた。ひとつは、人間の能力が発達する可能性を探求する初期の心理学研究であり、もうひとつは、フォックスウェル宛の手紙において明示された社会心理学であった。後者は、大衆の動機や区分について分析するものと指摘されていた。ところが、マーシャルの諸著作において、社会心理学に関する議論は展開されていない。そこで、『産業と商業』を検討することから社会心理学の具体的な学問的性質を指摘した。その結果、マーシャルは、社会心理学がサービスと消費者心理の関係を探求する実験的な心理学として把握していたことが明らかになった。さらに、マーシャルのいう社会心理学は、初期の心理学研究とは異なるものであり、現在でいうところの産業心理学として解釈することができた。手紙にも明示されているように、「経済学に有用な」という意味で、マーシャルは社会心理学を経済学に求めたにすぎない。貧困問題

の解決を研究の動機としていたマーシャルの理想は、やはり人間を分析対象とする初期心理学研究にあったといえる。

このようにして、本稿は、マーシャルが一貫して初期の心理学研究に関心を抱いていたことを明らかにすることによって、彼の経済学体系における人間研究の重要性を指摘した。だが、この追究の先には、なぜ『原理』のなかに初期心理学研究の成果をはっきりと見出すことができないのかという問いが存在する。言い換えれば、どうしてマーシャルは、教科書的な性質を帯びた書物を書いたのであるのか、あるいは、書かざるをえなかったのであろうか。この点に対するひとつの解答は、ケンブリッジ大学における経済学の制度化について検討することによって明らかにすることができるであろう。橋本(1989, 18頁)のいうように、ケンブリッジ大学における経済学の制度化あるいは経済学トライポスの設置は、マーシャルひとりの尽力によるものであった。専門的経済学者の養成とビジネスマンの教育の双方を目的として、マーシャルは経済学トライポスの設置に向けて奔走した。このことはまた、マーシャルが経済学トライポスのテキストとして『原理』を構成し、改訂していたのではないかと、という疑問を生じさせる。『原理』は、1890年に初版が出版されてから、およそ30年間に七回改訂された。そして、1907年の『原理』第五版までに、ほとんどの改訂を終えている。実際に、第五版から第八版にかけて大きな構成上の変更は行われていない。ケンブリッジ大学の経済学教授として在職中つまり、『原理』第五版の出版より前に、マーシャルは純粋経済学の静学分析を中心に『原理』の改訂を行った。純粋経済学的な分析手法は、経済進歩という静態では捉えることのできない経済の動きを理解するための準備ないし訓練として位置づけられた。

したがって、どのようにして初期の心理学研究がマーシャル経済学の表舞台から退いていったのかを『原理』の版別移動との関係から明らか

にする必要がある。この問題は、マーシャルの経済学と心理学研究の関係を考える上で究明すべき重要な論点のひとつであるが、この点に関する詳述は別稿に委ねたい。

参考文献 引用文の訳は適宜変更した。

Blaug, M. 1996. *Economic Theory in Retrospect*, fifth edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Coase, R.H. [1984] 1996. Alfred Marshall's Mother and Father. *History of Political Economy*. In *Alfred Marshall Critical Assessments*, volume, VI. edited by John Cunningham Wood. London /New York: Routledge. pp.356-364.

Cook, S. 2004. Missing links in Marshall's early thoughts on education. *European Journal History of Economic Thought* 11(4) 555-578.

——— 2006. Economics and Psychology. In *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli. G. Becattini. And M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar. 190-196.

Groenewegen, P. 1995. *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842-1924*. Brookfield: Edward Elgar Publisher.

Guillebaud, C.W. 1961. *Alfred Marshall Principles of Economics*. 9th (Variorum) edition Vol.2, NOTES. London: Macmillan.

橋本昭一 1989. 「経済学トライポスの創設とマーシャル」『関西大学経済論集』33(3), 1-24頁。

Hume, D. [1740]1964. *A Treatise of Human Nature and Dialogues Concerning Natural Religion*. In *David Hume The Philosophical Works*. Vol.1, 2. Aalen: Scientia Verlag Aalen. 大槻春彦訳『人性論』岩波書店, 1948年。

飯田鼎 1996. 「終章 『市民的最低限を求めて』」『ヴィクトリア時代の社会と労働問題 著作集 第一巻』所収, 御茶の水書房, 363-407頁。

今田恵 1962. 『心理学史』岩波書店。

岩下伸朗 2008. 『マーシャル経済学研究』ナカニシヤ

出版。

Keynes, J.M. [1933] 1972. *Essays in Biography*. In *The Collected Writings of John Maynard Keynes*. Vol.X. London and New York: Macmillan and Cambridge University Press. 大野忠男訳『ケインズ全集 第10巻 人物評伝』東洋経済新報社, 1980年。

近藤真司 1989. 「マーシャルの労働者論」『竜谷経済経営論集』23(4)109-128頁。

——— 1990. 「『生活基準』の経済学」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編, ミネルヴァ書房, 96-127頁。

——— 1993. 「マーシャルとJ.S.ミル」『マーシャルと同時代の経済学』所収, 井上琢智, 坂口正志編, ミネルヴァ書房, 52-82頁。

——— 1995. 「経済進歩における労働者の役割」『龍谷大学経済学論集』34(4), 91-117頁。

——— 1997. 『マーシャルの「生活基準」の経済学』大阪府立大学経済研究叢書, 第85冊。

Marshall, A. 1867a. The Law of Parsimony. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 95-103.

——— 1867b. Ferrier's Proposition One. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 104-115.

——— 1868a. Ye Machine. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 116-132.

——— 1868b. The Duty of Logician or the System-maker to the Metaphysician and to the Practical Man of Science. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 133-148.

——— 1870. *On Method and The History of Economics*. In *Reprints of Economic Classics*. Series 2 Number 5. edited by P. D. Groenewegen. University of Sidney, Department of Economics. Center for the Study of the History of Economic Thought. 1990. 1-21.

- 1872. Mr. Jevons' Theory of Political Economy. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. London: Macmillan. 93-100. 永澤越郎訳「ジェヴォンズ氏の『経済理論』」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 316-325頁, 1991年。
- 1873. The Future of Working Classes. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. London: Macmillan. 101-118. 永澤越郎訳「労働者階級の将来」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 193-218頁, 1991年。
- 1875. Some Features of American Industry. In *The Early Economic Writings of Alfred Marshall 1867-1890*. Volume 2. edited by J.K. Whitaker. London: The Macmillan Press LTD. 355-377.
- 1877. Some Aspects of Modern Industrial Life. *Marshall Studies Bulletin*. edited by K. Caldari and T. Nishizawa. Volume. X. 2008. (<http://www.dse.unifi.it/marshall/caldari10.html>)
- 1878. The Economic Condition of America. In *Collected Essays of Alfred Marshall*. Vol.2. edited by P. Groenewegen. Bristol/Tokyo: Overstone/Kyokuto. pp.61-67.
- 1898. Distribution and Exchange. *The Economic Journal*, 8(29) 37-59.
- 1890. *Principles of Economics*. 1st edition. London: Macmillan.
- 1907. Social Possibilities of Economic Chivalry. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. London: Macmillan. 323-346. 永澤越郎訳「経済騎士道の社会的可能性」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 128-160頁, 1991年。
- 1920. *Principles of Economics*. 8th edition. London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター信山社, 1985年。
- 1923. *Industry and Trade*. 4th Edition. London: Macmillan. 永澤越郎訳『産業と商業』岩波ブックセンター信山社, 1986年。
- 1961. *Principles of Economics*. 9th (Variorum) edition. London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』岩波ブックセンター信山社, 1985年。
- Marshall, A. and Marshall, M. P. 1881. *The Economics of Industry*, 2nd Edition. London: Macmillan. 橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部, 1985年。
- Marshall, M. P. *What I Remember*, Cambridge: the Cambridge University Press.
- Matsuyama, N. 2009. Relativity of Alfred Marshall's Psychological Research and Economics. *Young Scholars Seminar 2009*, by Japan of the Society for the History of Economic Thought. (<http://room409-1.ih.otaru-uc.ac.jp/yss2009/papers/Matsuyama%2020090325.pdf>)
- Münsterberg, H. 1913. *Psychology and Industrial Efficiency*. Boston: Houghton Mifflin.
- 松山直樹 2009a. 「アルフレッド・マーシャルの共感の概念——マーシャル経済学における教育の役割との関係をめぐって——」『経済学研究』北海道大学 9(2), 57-80頁。
- 2009b. 「マーシャル経済学におけるアメリカ研究旅行の影響——有機的な経済成長理論の根本思想をめぐって——」『ディスカッションペーパー』北海道大学, Series B, No. 2009-83, 1-28頁。
- 2010. 「A. マーシャルにおける心理学研究と経済学との連関」『経済学史研究』第51巻第2号, 51-67頁。
- 西岡幹雄 1993. 「心理学から経済学へ——マーシャルのYe Machineの性格をめぐって——」『経済学論叢』44(4)68-91頁。
- 1997. 『マーシャル研究』晃洋書房。
- 西岡幹雄・近藤真司 2002. 『ヴィクトリア時代の経済像』萌書房。
- 西沢保 2007. 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店。
- Pigou, A.C. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*.

- London: Macmillan.
- Raffaelli, T. 1994. Marshall's Analysis of The Human Mind. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, Archival Supplement 4. 57-93.
- 2003. *Marshall's Evolutionary Economics*. New York: Routledge.
- 坂口正志 1990. 「有機的成長論」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編, ミネルヴァ書房, 214-250頁。
- 白井孝昌 1993. 「ケインズの描いた A. マーシャル像」『経済学の射程』所収, ミネルヴァ書房, 153-179頁。
- Schabas, M. 2003. From Political Economy to Positive Economics. In *The Cambridge History of Philosophy: 1870 - 1945*. edited by T. Baldwin. Cambridge: Cambridge University Press. 235-244.
- Schumpeter, J.A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店, 1980年。
- Smith, A. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. In *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith II*. Vol.1, 2. Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』中公文庫, 1978年。
- [1790] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. In *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith I*. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道德感情論』岩波文庫. 2003年。
- Tocqueville, Alexis de. [1835] 1951. *De la démocratie en Aérique*, Vol.1. In *Œuvre, Papiers et Correspondence d'Alexis de Tocqueville I*. 井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治』, 講談社学術文庫, 1987年。
- McWilliams-Tullberg, R. 1975. Marshall's "Tendency to Socialism," *History of Political Economy*. 7(1)
- Whitaker, J.K. 1975. *The Early Economic Writings of Alfred Marshall*. Vol.1, 2. The Macmillan Press LTD: London.
- 1990. What happened to the Second volume of the Principles?. *Centenary Essays on Alfred Marshall*. edited by J.K. Whitaker. UK: Cambridge University Press. 193-222. 西岡幹雄訳「『経済学原理』の第二巻はどうなったのか?」『マーシャル経済学の体系』所収, ミネルヴァ書房, 241-277頁, 1997年。
- 1996. *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*. Vol.1,2,3. New York: Cambridge University Press.
- 八木紀一郎 1993. 「マーシャルとマルクス 『耐忍』と『再生産』」『マーシャルと同時代の経済学』所収, 井上琢智, 坂口正志編, ミネルヴァ書房, 141-161頁。